義我太史獨學新書

壹

歷史

父美

張洋大孫記

竹本義太夫

義太夫は筑後椽を受領したるを以て竹本筑後椽といふ姓は藤原、名は博敎、攝津國東成郡天王寺村の農にして五郎兵衛と稱す、性淨瑠璃を好み、中年にして井上播磨の門人清水理兵衛に就て學ぶ、其技漸く進みて、清水理太夫と稱し、京都四條河原に於て、演戲を興行す、理太夫たもへらく、播磨流は地節長くして音を表とし節を裏とす、宇治嘉太夫流は、地節短かくして、音を裏にし節を細かくす、兩流ともいまだ全く其宜しきを得ず、吾此表裏を適和して、其宜しきを得んと、是れより日夜勉勵研究して、遂に義太夫節の一流を案出せり、延寶中京都に上り、宇治嘉太夫の操り座を勤む、此時嘉太夫より音節の秘を傳受せりといふ是に於て竹本義太夫と改名し、貞享二年初めて大阪道頓堀に、操り芝居を興行す、今の浪花座則ち是なり、此時大西といへる名代にて宇治淨瑠璃世繼曾我を語れり、元祿十四年宣旨を受けて、竹本筑後少椽と改む、時に近松門左衛門といへる作者ありて、其作る所義太夫節に適合したれば、筑後專ら其作を語りて名益々世上に著はる、寶永元年老を以て座元を引き、二年竹田出雲椽座元と成る、正德四年九月十日病みて歿す、時に年六十四、墓は四天王寺の南門外なる、土塔山起願寺中にあり、其後紀念碑を天王寺の西門念佛堂前に建つ聲曲類纂に此所に葬るとあるは誤りなり、貞享より正德に至る三十餘年間、人形に和して義太夫の語りたるもの凡そ百六十餘曲あり、今に至つて義太夫の譜章を唱す斯界の一大偉人たり。（南水）

攝津大掾

竹澤權右衛門

權右衛門は、むかし淨瑠璃の達人井上播磨掾の門人にして淨瑠璃節を能くし、殊に三味線に巧なり、初め井上を冒し、後竹澤に改む、此人は義太夫節三味線の開祖たり、依て今三絃家に野澤、鶴澤、豐澤、の稱へあるは、竹澤の澤の字を傳へたるものなり、淨瑠璃大系圖に近松門左衛門の作なる、用明天皇職人鏡の大切、鐘入之段を、出語り出づかひにしたるは、權右衛門の創意なりといふ、享年歿年は詳かならざれども、竹本義太夫より少し前なるべし。（南水）

竹本義太夫

攝津大掾

竹澤權右衛門

權右衛門は、むかし淨瑠璃の達人井上播磨掾の門人にして淨瑠璃節を能くし、殊に三味線に巧なり、初め井上を冒し、後竹澤に改む、此人は義太夫節三味線の開祖たり、依て今三絃家に野澤、鶴澤、豐澤、の稱へあるは、竹澤の澤の字を傳へたるものなり、淨瑠璃大系圖に近松門左衛門の作なる、用明天皇職人鑑の大切、鐘入之段を、出語り出づかひにしたるは、權右衛門の創意なりといふ、享年歿年は詳かならざれども、竹本義太夫より少し前なるべし。

（南水）

竹本義太夫

初代
豐澤團平

五代目
豐澤廣助

六代目
豐澤廣助

五代目
豐澤廣助

竹本越路太夫

竹本津太夫

竹本津太夫

野澤吉兵衛

大倉喜七郎

竹本朝太夫

[illegible]吉[illegible]

竹本頼太夫

序

豊澤松太郎

吾れ此としつき幾百番のつくし
て勇趣に達せんと思ふの然ら
しむる語ること
甚た鮮し唯三絃は
共合ふか爲めに語れるなり蓋
し人の音調には時として變調あれども弾く三絃

頃太公幕豊

序

吾れ此としつき幾百番のかたり物に心をつくして妙趣に達せんと冀へとも氣と機の異同の然らしむるか語り終りて吾れと我心に滿足せることと甚た鮮し唯三絃は語れる節に合はすものなから其合ふか爲めに語れること往々にして之あり蓋し人の音調には時として變調あれとも彈く三絃

謡曲大辞典

の譜に偽りなければ忌むべき語り癖なと免るゝことを得へく初學としては正しき三絃に從ふこそ善けれ今義太夫獨習新書なるもの、稿本を見るに及んで此点に於て頗る我心を得たり則ち思ふ所をしるして序と爲すと云爾

大正六年初春　八十一翁

攝津大椽

序

今は昔日となりぬ淨瑠理に節紅葉なる書あり歌三味線に力草なる書ありて共に聲調音譜をつばらにし時の人之れを便とせしも多かりしが物換り星移れは音調にも自と異同を生して舊尺のみを則とし難きものあり這たひ文樂社にて編纂されし義太夫獨習新書を見るに古きを溫ね新しき

に從ひ三絃を基として聲調をも細かに示したり斯界に遊ばんとする人此書に依らば座がらにして趣味を得るに庶幾からんかをはるゝまゝに書して序となす

大正六年初春　七十六翁　豊澤廣助

緒言

夫れ藝は心の專一なるを要す、心專一ならざるに於ては精妙の域に進むこと難し、音曲の技に於ける其曲多く、其術複雜なり、特に三絃の彈方に於ては蘊奥の秘術多々ありて、其流派も亦從て多し、僅か三筋の糸にて、八音十二律を明かにし、否、勸善懲惡の眞意義、仁義釋教、戀無常を明かにし以て音律の美を極め、人情の微を寫し國家社會の和順を助くるもの、而して義太夫の技にありては、一層精妙にして且つ其術に蘊奥のあるあり、故に其法則秩序等も殊に規矩の整齊を要する所以なり

然れども專門に之を學ばんとするものは、多年の歲月を厭はず良師に就き

て其淵源を極め、精妙の技に熟達するを得べしと雖も、普通速成を期するの人に有りては、専門家の攻究に倣はゞ、恐くば他の業務に遮られて遺憾にも中途にして廢するに至るや必せり、本書は普通速成を期せらるゝ諸士の爲めに、業務の餘假にても習了し得らるべき爲め、一々符号を明記し、師に就かずして其原理を了解せしめ、自在に曲を奏する事を得るの便に供せんが爲め編纂せしものなり

夫れ三絃の技は上手に限りなく、下手に限りなしと云ふ程、複雑幽奥を極めたるものなれば、隨て其修行の如きも、自然専門家と普通稽古人との差別を生ずる所以なりと雖も、此書に因て研究を惰らずば、普通の稽古人たりとも精妙の域に達し、妙手の専門家と其技を競ふを得べし、要は唯だ修行の精疎にあるのみ

されども天下の事物、之れを行ふには皆法あり術あり、而して其法の原理を究めずして、其の術の蘊奥を探ることを得ること難し、三絃の技も亦た多くの法則ありて、之れを學ぶや容易の業にはあらざるなり、且つ往古より妙手の輩出でし結果、種々の流派を生じ、各派各流皆夫れ夫れに、妙味のあるありて、後進子弟の方向に迷ふ所なれども、其姿勢、運指、撥放し、音ノ、彈勢、調子、音間の長短、曲手等の要途に至りては、何れも更らに異なる事なし、故に此要途釣合の如何を窮むるに於ては、其他は自已の好

む所に從ひて、自由に妙域に達する事を得べし、されども此釣合如何を窮むるには、多少の時日と習熟を積むに在らざれば、容易に了知し得らるべきものに非ず、必ずや、漸を積みて秩序的に、習熟するにあらずんば、決して望む可らず、古言に、言ふは易し行ふは難しと云ふは此事なり

又彈方にも、夫々流派あり、其據る所各派一樣ならず、故に之を學ぶもの、又其撰を異にするは、自然の勢なれども、初學の者にありては、一旦我が好む所の、手筋に就きて、學び始めたる以上は、漫りに他の手筋に改むべからず、彼れを學び之れを習ふは、徒らに迷ひを重ね、惑を添ゆるのみにして、上達を妨ぐること極めて甚だし、故に或る手筋に就き學び初めなば、

其手筋を覺ゑ釣合の出來得るに至り、而して後、彼是を斟酌して、自から彈風とも云ふ可き、妙所を見出す事を得べきなり、されども斯は彈絃の大体を明にして、然る後に非ざれば、初學者の得て望む所には非ざるなり

獨習は何によらず、進歩極めて遲しと云ふものあれども、其は之れを學ぶ良書なきと、師に就かざるを以て、自己の短所を見出すことの疎なるによる、若も良書有つて師に代ゆる事を得るならば、三絃獨習の如きは、寧ろ師に就くより進歩の速なるものなり、本書の如きは、即ち庸師に優るの良書にして、原理法則を精密に記述し、符の活用を明辯し、章を付する等、一層の精を加へあれば、獨習者にして其原理と法則とを詳かにし、符を見

て練習せらるゝ時は、師に就て學ぶより一入進歩を見ることあるべし

師に就て學ぶものは、一々其指導を受け得るが故に、進歩の速かなる可き道理なれども、一利一害は數の免れざる所にして、依賴心の爲に其鋭氣を支へられ、却て進歩の鈍き傾を來す例も尠からず、故に名師は門弟を教諭するに、常に言を以て先づ紘理を說明して、符を了知せしめ而して技を授けられしと、故に一曲の技を修むるも、容易の業にはあらざりしと云ふ

初學者獨習の資に供するの書にして、既に梓に上すもの多し、されども皆秘する所ありて、紘符其他を詳密に顯はすもの少きは、其著者の罪に非ずして、其實之を詳密に顯はす事の因難なればなり、編者之を遺憾に思ひ、何卒して獨習者をして、師を求めずして居ながら自在に、修業し得せしめんものと、多年丹誠を凝らして、數十部の秘編傳書を涉獵し、更に進んで先哲諸氏の秘稿に及び、蘊奥秘術毫も剩す所無く記述して、漸く稿を脫し、當時の名師鶴澤才治氏、鶴澤重造氏、豐澤廣助氏三師の鑑賞且つ大に賛助を得て茲に始て今回世に公にする事と爲せり、其一卷は彈紘符号の說明、發音の要領を主として辨明することに止め、次卷よりして本文を揭げ、愈々益々義太夫研究者、否、獨習者の指南に供へんとす

大正三年　月

編者謹識

凡例

一三絃の技は音曲百般の技中最も秘蘊のあるものなれば、符を以て辨明するは甚だ難事の術なれども、先哲諸氏の遺稿并に現今の名師諸氏の秘稿に基きて、義太夫に關係ある樞要のものを網羅し、且つ初學の友に會得し易からしめんが爲め、總て平假名文字にて記載するものなり

一本書の主眼とする符号は、初學者の速成を欲する爲め、符号を字引にしたるは、著者の大に考ふる所にして即ち義太夫獨習新書と、名稱を付したる所以なり

一編中に附せる黑の章は淨瑠理の符号にして、赤の章は三絃の符号なり、之れ両者相俟て獨習し易からんことを欲すればなり

一淨瑠璃の符号説明は、發音の辨の末尾に詳述し、三絃符号の説明は、後に詳明するこゝす

一編中例話註釋あり、之れ先哲の門人を教諭せらるゝの際、用ひられしものにして、初學のものをして、不知不識の間、自然と義太夫の秘奥を、了解し易からしめんが爲なり、編者が之を引用せるは、獨習者の爲に特に意を用ゐし所なり

一編中原本著者の履歴を掲ぐるは、初學の人をして、義太夫の淵源を知しむるの意に外ならず

編者識

義太夫獨習新書目次摘要

第壹卷

口絵　題字　題畫

肖像畫　寫眞肖像　序文

緒言　凡例　挿絵

符號の定義　符號の稱

連符の解　連符間の辨

符を獨習するの要

三絃彈方説明　運指の辨　握撥の辨

音〆の辨　彈勢の辨　表裏の辨

調子の辨　拍子の辨　相方の辨

發音の辨　第一語音　第二音便

第三略音　第四約音　第五延音
第六音通　同行音通　同列音通
義太夫節の名稱及三絃符號
佐和利の手解
二十四孝十種香　八陣正清本城　日吉丸雅櫻三
忠臣藏茶屋場　朝顔日記宿屋　妹脊山三ノ切
太功記本能寺　讐仇討餞別　於染久松質店
三代記三浦別　安達三袖萩祭文　千両幟猪名川内
御所櫻三段目　彦山權現毛谷村　忠臣藏本藏下邸
桂川帶屋　昔八丈城木屋　菅原傳授寺子屋
玉藻前三道春舘　合邦辻合邦内　三勝半七酒屋
作り替の辨　壇之浦魚物軍記　鯉責之段

義太夫段物の符號

祇園祭禮信仰記三　上焮屋之段

第貳卷

竹本此太夫の教示

語出　時代物世話　修羅事
位有人　大將　うれい　手負
ちやり　酒醉　阿房　ごもり
爺　姥　女房　遊女　娘
子供　敵役　詰合　掛合
艶事　道行　景事　以上の各辨
詞より地にかゝる四地の事
淨瑠理節章の辨　淨瑠理章附の事

三重七ヶ品の辨　送りに七ヶ傳の辨
ハズミ三種の辨　五節段切の辨
繪本太功記二段目本能寺之段
一の谷嫩軍記二段目須磨の浦之段
仝　三段目熊谷陣屋之段
加羅先代萩御殿政岡忠義之段

第參卷

古人の教示去嫌七ヶ條の事
其第一　其第二　其第三　其第四　其第五
其第六　其第七　以上各辨
淨瑠璃語り方の辨
菅原傳授手習鑑松王下屋敷之段
播州皿屋敷鐵山館之段
平假名盛衰記逆櫓之松

第四卷

淨瑠璃文意の起因抄拔
朝顔日記四ノ口濱松小家之段
鎌倉三代記三浦別の段
三日太平記九ツ目松下住家之段

第五卷

符を獨習するの新法
義太夫節の音階
日連記三段目勘作住家之段
箱根靈現躄仇討施行場之段

箱根靈現躄仇討十二冊目瀧之段

第六卷

伊賀越道中雙六沼津之段
傾城阿波鳴門八ッ目順禮歌之段
繪本太功記七段目杉の森之段

第七卷

假名手本忠臣藏六勘平腹切
戀娘昔八丈城木屋之段
義經千本櫻道行之段

第八卷

八陣守護城八ッ目正清本城之段
妹脊山婦女庭訓三ノ口花渡之段
妹脊山婦女庭訓三段目の切山之段
妹脊山婦女庭訓に就ての話

第九卷

源平盛衰記松波琵琶之段
攝州合邦辻下の卷合邦内之段
本朝二十四孝狐火之段

第十卷

櫻鍔恨鮫鞘鱣谷之段
丹波與作上之卷
仝　中之卷
仝　下之卷
右文意の註釋

以上目次大尾

義太夫獨習新書壹の巻

符號之定義

三線の符号はイロハの符に依れるものにして圖に示し在る如し故に符号の處を指にてオサへる毎に音の異なるものなり是れ糸坪なれば能く暗記し置くこと肝要なり

一は三の糸の音なり

ろは二の糸の音なり

セは一の糸の音なり

一ムユぬユニつらぬクケエサメエセ三の糸

ろモちルいれねムのヤフテキミヒスニの糸

セへりヲヨイナウオマコアユシモン一の糸

外に要する符を左に顯す

㊀は三の糸を左の総指にて順次にハネル符号と知るべし

キは一の糸音及び二三の糸音を悉く消てポテチンと云ふ如き音をなす符号なり

即ち　ヒキ　の符号をなす事あり之れ其理の存するなり

メは一の糸を絃竿の外にハヅシて音を發せしむる符号なり

くは前に記せる手と同じ事を彈に用ゆる符号にして所謂同斷と云ふ意味なり亦

た　―　、であるも同じ

ンの符は左手の指にて打て音を發せしむるか、糸を指にて摺て發音せしむるに

用ゆるなり

りの字を符の小脇に記すは(リン)とカヂル音色なり尤も三の糸のみとす

レの字を小脇に記すは(レン)とカヂル印なり

ロの字を符の小脇に記すは二の糸をカヂル音にて所謂(ロン)と云ふ意味なり

ルの字を符の小脇に記すは二の糸を撥にてスクヒアゲル音にて所謂(ルン)と云

ふ意味なり

トンの字を記せるは彈かずして啻だ左の指にて糸を打て音を出す符なり

符號の稱

前記の符号にも其名稱ありて世間口傳の符となり居れる者あり即ち左の如きこれなり

ノ　三上　之は三の糸の極天の坪を押へて音を發す故に此名あり

ヒ　二上　之は二の糸の極天なり

ヘ　一上　之は一の糸の極天なり

ヒ　コワリ　之は三の糸の極天の次を押へて音を發す此手を彈やコワゲなる聲を出さしむるに用ゆ故に其名あり

ハ　ハリキリ　竿の續目一番頭の處にて三の糸を押へて音を發す此手多く語人の聲を張揚さす時に用ゆ故に其名あり

ち　ギン　二の糸の極天の次を押へて音を發す

つ　ギン　三の糸にて竿の續目二番の跡ある處を押へて彈絃するを云ふ共にギンと云ふは同性異音なるが故なり

ニ　ウレヒ　三の糸にて張り切とギンとの間の坪にて指遣ひ中指にて押へ音を出すものにて此手多く悲みの時に彈き出だす故に此名あり

ケ　カン　三の糸にて一番響き渡る音を出だす坪なり或は云ふ此音肝の臓にしみわたるが如しと又曰ふカンは甲なりと

右は普通三絃界に於て口符として多く用ゆる言葉なれば覺知し置くべきなり其他はさしたる要もなければ茲に贅せず

連符の解

符号を連ねるとは先づ糸坪を一々落なく胸に藏むべきなり即ち人の彈手を記し置かんにも先きに糸道の符を書し而して其傍に間の符を書くべし

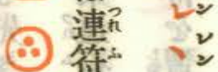
元來連符なる者は後に著す運指を明かにせば能く解し得らるゝ者なれば彼是對照して連符を習得するを要す今左に連符の書き方を記し同時に連符の應用を掲ぐ

チリ　ヒ、テン　此の手は實に符を獨習するの端緒として容易に辨明することを得るを以て茲に掲げ又間の辨にも載せたり之れ三絃界の最も手解と

知らるべし

右は三絃界に於て多く用ゆる事なれば之れが略符あり即ち(セ)の符を書せり

右は連符の様を記せる者なり又此の手の略符は左の如し



連符の要とする所は音を耳にし彈手を胸にして目に符を見るにあり故に獨習には之を逆にし符を見るや胸に鑑み豫て耳にせし絃音に照し接絃すべきなり今假りに符を書くの注意を述んに初めの程は人の指遣を見て書く様なれども慣るに隨ひ耳に音を確かめ指遣を見ずして書き得るに至る之れ口三味線にても解し得らるゝに至る所以なり往古の人は一間を隔てゝ稽古せしと云ふも蓋し此理の存する所ならん

以上説ところ口三味線と符号とを能く〳〵考ふれば逸早く符を書き又獨習し得るに至る者なれば此道理を辨まふこそ肝要なれ

連符間の辨

符を連ねたれば先づ間を明かにせざるべからず偖間の何たる者なるやを述べんに符と符の休む間の呼吸を云ふ之れ連符の間を解する仕宜なり

元來三絃界に於て間ほど大切なるものはなきものなり故に如何に連符しあればとて間を顯さゞれば盲目同様なり今間を大別して定間、走間、長間、連間の四種となす

(一) 定間は雨垂拍子の事にて三絃一定の間にて符號左の如し

(一) 走間は急ぎて符と符を連る義なり

此符ある時は一通の間に彈べし

(一)　一　此符あるは総て走て彈べし

(一)　長間は定間の倍間なり

一　此符あれば間を長く隔てゝ彈べし

(一)　連間は俗に彈き流と云ふ義にて間を連ぬるを云ふ

—　此符あれば續けて彈べし

以上は皆後に著あれば自然に解し得らるゝなれど口傳を要する間あり左に其要を示す

ン　ハ　ヤ　ヒ　ヨ　ハヽイヤ

右は瞬時の息を重んずる義なれば宜しく練磨して其薀奥を解すべき事なれども世間一般に三絃界口符として用つゝある者なれば少し道に入る時はさして六つケ敷事なからん啻此間の入るべきと入らざる所を見出す之れ此術の薀奥と知べし

今茲に　チリチヽテン　の彈方に就き間を辨明せん

ヒリヒヒヒ　之れ定間にして角を附けて彈く樣に音〻を籠て可なり

ヒリヒヒ　之れ走間にして急速に彈なり

ヒリヒヒ　之れ連間にして彈流に彈べきなり蓋し角を立ざる事肝要なり

倍間は本手に要なければ茲に略す

今走間と定間の記号を擧れば左の如き(チチン)と走りて(チン)と定間に戻る等の如し

ヒつらヒヒ

(一)　長間は左の如き記号をなす

ヒンヒンヒ

(一)　亦連間と定間の境は左の如し

つナンつのふニ一

以上は間の大略なれども猶細密なる間を附せんとなれば五之巻と對照して其宜しきに從ふべし

符を獨習へるの要

符を獨習せんには須べからく口三味線にて指運びと間を考究し最早口三味線にて出來得るに至れば暗々裡に彈絃するを覺ゆるものあるが故に暗誦口三味線を精出し後に接絃するを要す妄りに接絃すべからず間を誤るの嫌あればなり

符を獨習するには氣永く持つこと肝要なり総じて氣永く持つべき事は藝道の極秘なれども符を學ぶ者は一層氣永く思ふて少し宛稽古すべき事なり而して符を獨習して今や知覺せしと思ひなば直ちに符本を放るゝ事を勤むべし餘り符本に泥む時は遂に諺に云へるが如く字引と首引するに至る者なれば慎むべき事なり

符を獨習するには以上口三味線を學ぶことを述べり而して初學者に於ては口三味線も程克く廻り兼る者なれば左に「高い山」の端歌を符に示し手初を掲げん

たかいやまから—たゝそこみればよ
(ヤイ)うりやふをびの—はなざかりよ
ハリヤどんどんどんどん
モ一ッどんどんどんどん

(此の分二上り)

右符を見て充分彈絃するに至れば先きに掲ぐる義太夫節の符号に就て順次叮嚀に獨習すべし自然と符を見れば直ちに接絃するも自在に彈絃することを得るものなり故に達人仲間に於ては未知の段物も一夜の間に獨習して翌日の席に於て相方を勤むる等あるは皆符を獨習する事を鍛練せし賜なり

今左に初學者の爲に問答を設けて參考に供す

（問）コワリとは何の坪なるや

（答）ン

（問）三のギンは何の坪なるや

（答）つ

（問）（セ）の符を分折せば如何又彈方の間を顯はせよ

（答）セとは　つりつン　の略符なり之を雨垂拍子とて一定の間に彈時は　つ、つ、ン、ン。　手早く彈時は　つりつン。　單に彈き流す時は　つりつン。　間の符號なり

（問）ヨ　の符を分折せば如何

（答）つ、ン、ン、ン

（問）ン　の符を分折記載せよ

（答）ぬケぬつン

（問）四合の符を示せ

（答）エ、ーケ。エケエエケ。エケぬケぬつン。

（問）ハリキリ　より次ぎに行くべき糸道を問ふ

（答）多くは　れねンつンン　等なり手筋の塲合により　ぬい　に行く事あり又摺

りて二の糸に入れば　ムの　の糸道に指運びをなす

（問）大ノリの符を問ふ

（答）ケ。ケ。ケケケケ㋑ケケケ。ケケケ。エ、、。エ、、。
ヌ、、。ヌ、、。ケヌケヌつム　ンムヌ。いンヌいヌ

ケ、、。〜。ケ、、ケリンエさりンさりさりン。さり〜〜。さりエ〜
けるりンけレヤる。けレけエ。エレヌけレつ。ゝりン つるりぬゝ。つり〜〜ゝりつりン
ごゝンン。ゝンろ。つゝ。ゝりろ

（問）右は鶴澤清蔵氏遺稿の切端を其の儘記載せし者なり故に太紘仲間の符號たるやまた明かなり

今之れを考究して本書の精密符号に訂正せよ

（答）ケケケ。ケケケ。ケ、、ケリンエサリンサリサリン。サリサリサリ。サリエサリエケヌリン
ケレヤヌ㋑ケレケエ㋑エレヌケレつ。ゝりンつるりぬゝ。つりつりゝりつりゝいヌンン。
ゝンろろ。つゝ。ゝりろ

以上の問答落もなく腹入するなれば先づ太紘の手解を終へたるものなれば本書各辨に就き例題の符号を詳かにするを要す今夫れ本書各辨理解し得らるゝ樣親切に本書を詳讀せられよ

三絃の彈方説明

總じて義太夫の三味線は音色厚く好當なるを古風こせり當時は重き駒を掛け音色細く障りは蟬の鳴音に等しく端手なるを專一こせり尤も風儀に寄るこ雖も時代の堅き塲抔は乘り移り悪しくさながら淺間敷く聞に自然こ淨瑠理の實を妨げ情を失ふ故に注意を要する事共なり故に欠聲にも程あり太夫よりも大きなる聲を出だし眸き叫びたり又手の廻るに任せて引倒し掛撥、すくひ撥のちやらくらにて紛らかし彈きにくき事は彈能樣に拵へ直し端手を專らこするは素人だましこ云ふ者なり音も好く手も廻るは數多有れど義太夫節を能く彈くは出來難き者なり元來時代の中に世話あり世話の中に時代あり一行一句の間に氣を持ち虚實の心得ありて十分を八分に用る事助役の法こするなり總ての藝者人の善き事も知り悪き事も知ては居れど我藝の未熟より負をしみ出で横道へ行く事氣性の上下智愚の優劣にあるこなり當時こいへども端手をきらひ正道なる藝を好み充分に聞分る人もあるぞかし人及ばざれば情を以て恕すべしこ云ふ藝道に眞實なくんば饅頭の皮ばかり喰ふがごこし豈情を重んぜざる可んや

茲に彈絃の要途を摘記せば左の如し

- 生氣
  - 間
  - 調子
- 姿勢
  - 運指
  - 撥放
  - 音

以上圖解の位取を以て鍛練するを要するなり即ち先づ第一に生氣なる者を念頭に保ち置くべきなり生氣こは調子を崩さず間拍子を過たず常に死音のせぬ樣になすなり之れを平口に云へば生きたる絃音こなすべしこ謂ふここなり姿勢こは躰の搆へ方正しく常

に腹中に息含をなすべきを言ふなり初學者の指して要なき者と思ふ事も有るべけれど苟も彈絃するに當りて此姿勢調はざるに於ては音調はず曲律定まらず却て習絃の上に於ても捷徑を失ふものなり故に習絃には嚴正を守り符を見るには自由を主として萬端親切になすを常とすれば實際の席に腕前を顯す事を得る蓋し難きにあらざるなり以上は次ぎの各辨に就き參照あるべし

而して彈絃に流派ある事は已に緒言に述ぶる如く一種の彈風とも云ふべき事あり之れは古人の悟る所區々なりしと人心の嗜好一ならざるに依るなり然れども其大躰即ち接絃の釣合と云ふ事に至りては古今同轍にして各流派必ず一途に歸するものなり故に習絃中には此の釣合を知る事肝要なりとす此釣合だに知るを得ば餘は己の好む所により て練習して可なり師に就くは只此釣合を知る迄の修業とするの外ならざるべし

偖て各流派皆な釣合の同一なる事實は慥かなる例枚擧に遑あらざれども今初學者の爲め二三極簡易なる例を示せば左の如し

（甲）ふくしまゑ　きてことへば

ツナギ

（乙）ふくしまゑ　きてことへば

右彈方は大異なれ共同じ語りに應じて大体は同じ事なり

（甲）よしつ祢がじようせんのせんどうはま

つゑもんとこときわまる。おつつけほんゐをとぐるやふよふるよつけ

（乙）よしつ祢がじようせんのせんどうはまつゑもんとこときわまる。おつつけほんゐをとぐるやふよなるよつけ

以上釣合の必要を説けりされども尚不意味不了解のことありては本懐に背けるを以て左に一層平易に太功記十段目のくどき語り風に依り例せん

（甲）せめてはふごのごさいごよ。ぜんゑんよたちかえると。たつたひとことときかしてたべ　をがむわいのとてをあばし　いさめつふいつ　ひとをぢよをつとをおもふ　うらみふき

（乙）せめてはゝごのごさいごよ。ぜんゑん
よたちかえると。たつたひとことき
かしてたべ　をがむわいのとてをあは
しいさめつゝふいつひとをぢよ――をつ
とをおもふ　うらみふき

右の如き乙は變則なれども手を合しを延さゞればこそ一筋にこいふを延けり矢張前後一致せば同じ理に戻る者なれば人々の流儀に任して差支へなかるべきなり

然りと雖も寸善尺魔の敎ある如く習彈も亦たしかり所謂惡しき手筋に近附く者なれば常に前記の圖解に基き深く彈絃を考へ手筋良き樣注意すべき事ども

運指の辨

運指を解せんには先づ構へ方に注意せざるべからず姿勢宜しからざればまた指運び惡しきものなり偖て構へ方は已に各位の知らるゝ如く右の足先に三絃を載せ右手撥を握り左手の指を遣ふなり初學のものにありては往々撥を握るに指に力を入れる如きあり之れ誤まれる事にて右手三絃を押さへる處に力を籠めざるべからず而る時は指運び自由自在なる者なり丁度筆者の指先の運を忌み懸腕こて腕より運筆するを貴ぶと同理なりさすれば隨て音色にも味あれば忽かせにすべからず

運指は長短緩急振曲の音節を正ふする事を要す必ずしも騒がしくすべからず

運指は余り巧なるべからず忌やらしき嫌あり又鈍きは見悪き心地するものなれば宜しく中庸を守り訛らぬ様注意すべし

運指は順序の道に依らざるべからず夫れ〳〵行道の定まりあるものなればなり故に若し指遣の少しにても無理あれば適當なる音調を發せざるものなり左に主なる行道を示さん

い ヨリ行道 モ ね れ ヲ ろ ー

ヱ ヨリ行道 い ル エ ぬ ム

ぬ ヨリ行道 ケ ク つ ヱ ヤ 等なり

稀れに ろ に行く事あり摺り下れば テ に入ることあり

ヱ ヨリ行道多し れ ね ヱ つ ヱ ム 等也

時として ぬ い に行く指遣あり又摺りて二に入れば ム の に行く

つ ヨリ行道 ム の ろ ヱ ム ね 等也

又 い ぬ に行く事あり

外に一の糸を押へて放つ時二の定法あり即ち

い ヨリは必ず二の糸に放つものなり

へ ヨリは必ず一の糸に放つものなり

他は之れに準じ推知すべし

握撥の辨

握撥法に二種あり（握撥とは撥を持つ様を云ふ）一は撥先きに母指を寄せ小指を伸ば

して撥上を握るこゝ二は可成母指を撥尾に退ぞけ小指を屈がめ撥中を握るこにあり其差は小指の伸縮こ握る位置少し異なるのみなれども甲は　ノリ物を彈く如き皮を打つ時に適し乙は　クドキ物を彈く如き細かく彈く時に適す、但し符を獨習する如き普通の稽古には必ず乙の法にて撥に力を籠めぬ樣になすべし之れ撥に氣を奪はれ運指に大なる妨げある故なり元來握撥には腕に力を籠めて決して指に力を用ゆべからざるは自然の勢ひなれば若しも小指を伸ばし撥先に母指を寄せ而して指に力を籠むる時は撥放れ難澁にして流暢なる音を出す能はざるべし

又實指虛掌こ云ふ事あり之れ撥を輕ろく握りて掌の中は虛こなる事なり蓋し此樣になるは熟練の結果なれば常に指先に力を用ひず腕に力を籠め三絃の胴を手足にて强く狹みて習練するを要す然れば自然に妙を得て掌中自づから虛こなるなり故に名人の握撥には掌中卵を握りたる如き虛を生ずこ聞けり初めて道に入ものゝ注意すべきこなり

音〳〵の辨

音〳〵は三調こて三ツを合体して正しき音を發するものなり故に之を鍛練するこそ肝要なれ而して三調こは一に腹中に息を籠むる事こ二に撥の糸を放るゝ工合こ三に指爪を以て糸道を止むる仕方なり是れ　ハツ　こ云ふ瞬間に調ぶべき術なれば筆の充分寫し盡す事能はず宜しく熟練して其術の妙域に進むべきこなり

偖て普通の音〳〵出來得るに至れば其語る文句の句意に考へ或は重く或は輕くそのよろしきに從ふべし

人々の彈方に依り華美なるあり沈着なるあり又絃音は細けれども音〳〵堅きあり太けれ共弱きありて素より其人々の好む所に從ふべきは勿論なれども編者の常に思ふ所は太

くして弱ならず所謂威あつて而も猛からざる君子の語調なり絃音も亦た願くば此の如き温良にして清爽ならんことを好む

他の音樂の如きは如何なる素人にても之を調ぶるに曲の巧拙は素より熟不熟夫丈の差あれども其音色に於ては大なる違ひなき者あれども三絃の如きは然らず熟と不熟は音色に於ても大に差あり

今其理由を述べんに三絃なるものは同じ坪を押ゆるにも上より糸を摺り下げて彈く時は音〳〵克くまた太き音出す事あるが如し假令いと彈くにも一上より摺り下りていを彈けば同じ坪音なれども太き音を出すべく又〳〵即ち三上を彈くにも少し爪にて摺る心持にて彈けば大に音〳〵に關係あるものなり

彈勢の辨

彈勢とは勢ひある音を出さしむるを云ふ故に生氣と云ふも敢て過言にあらざるなり之れ或は其形容を糸音に顯し或は文句の句意を承けて彈ずる等の如き皆彈勢と号づくるなり

同じ手にて瀧を彈くにも名人が彈ずれば其水勢自然と糸音に顯れ出るなり之れ彈勢の整頓する故に自然と實況を寫し出すなり別に不可思議の術あるにあらざるなり

併して彈勢を顯さん爲め場合の如何に依り彈方を更ゆべき事あり故に妙手の人は老は杖つく如く幼はいちらしく其合の手を彈くにも注意周到なるを以て悉く實際の形容を彈き出せり之れ他なし彈勢あるが故なり

又茲に　ノリ　を彈くに就いて左に符号を顯し説明せん

（矢ノリ）

ぬ|、、、、ケぬケぬつム。つンム|ね。いンイいね

（幼ノリ）

ケりぬり〜ケレりつ。〜。エりつりりつりセ。ランつエつ

（大ノリ）

ケ。ケ。ケ、、ケ|㋩ケ、|。ケ、|。エ、|。〜。ぬ|、、、。

ケぬケぬつムつンム|ね、ンイいね

（其他數種）

（一）ルちオ|り㋩ムねのナ。いイいね

スリ下

（二）ぬ、、、、つ。ぬ、ンルちンいイいね

（三）エケ。ラつ。つラケラケ、ンラつづム|ね。いイいね

（四）エケぬ。エ、ケぬ。サレケりケエサレケエぬり〜ケエケ、りカン

ぬつ。ぬ、、|ケぬケぬつム。つンム|ね。いンイいね

（五）テ、、|テぬケ、りカン。エり〜ケ、りカン。ぬりケりエりケり

ぬケレつ。ぬ、、|ケぬケぬつム。つンム|ね。いイいね

（六）ぬケつエ。ぬりケりエりケりンラつンム|ね。いンイいね

右の如き同じノリにも數種ありて時と場合の彈方あれば其場合の如何を推し考へ彈勢を籠めて彈く事を鍛練すべし蓋し編者の彈勢の解にノリの彈方を顯はすは繁雑に渉れども初學に解し易からんを欲すればなり

表裏の辨

凡べて物に陰あれば陽あり表あれば裏あり上あれば下ある天地の道理なれば三絃にも亦た表裏合符するの曲あり例令ば つ の坪を彈くと ち の坪を彈と合和するが如き矢張語手は ち の聲を發するに糸音 つ にて和曲するを以て表裏と號づく左に其一例を掲ぐ

めよはふみだの
かた　と　き　も

（目には涕の）
（片　時　も）

右淨瑠理と三絃の表裏

とくわかよ。ごまんざいとみよもさ

（表）かへましまを。あいけうありやたの
もしや。
とくわかよ。ごまんざいとみよもさ
（裏）かへまし　まを。あいけうありやた
のもしや

右三絃の表裏

本調子

さらばくも。とほざかるふね　と合

さらばくも。とほざかるふね　と合

二上り

右三絃本調子二上り合符の曲例

餘は推して知らるべし

抑も表裏は最も其秩序を保たざる可らず若し表走り裏遲るれば即ち天地の理に合はずして聞苦しく合曲に至りては瞬時の拍子と雖も合体を忽にすべからず今夫れ坐上の樽飾を見よ最と美麗にして諸人の賞翫するなれども若し内に醋の嗅ひあれば皆擯斥するや必せり此喩其當を得ざれ共其理に至りては相同じ是調和合体せざるが故なり

調子の辨

調子三年と俗にも云ふ如く三絃中大切なるものにて調子には五調子七調子こて音の母あり卽ち左の如し

一、平、双、黄、盤、断、勝、下、鳧、鸞、神、

上、　等の如し

支那の往古鳳聲を聞き時候の變遷を知りしとか其後十二律の筩を造り之れに因りて音を産み出せしと云ふこれ即ち右の五調子七調子の起る端緒にして達人に至れば春夏秋冬の調子を合すと聞けり

調子なるものは斯る蘊奥のある者なれば到底筆紙に盡し難きものなれば茲には初學の便利としてサワリ丈の事を記すことゝす

サワリとは一の糸の振音する全体をいふ初學の時は度々サワリを失なひ高金なる品物も弄物同様の音色となるべき事あれば深く注意してサワリを失はぬ様にすべし

而してサワリと名づくるは一の糸の間に〳〵木にサワリて振動するの謂れなれば可成其細工人の附けしを其儘にして私に搆へ替ゆる等は宜しからず、されども始めの程は着ぬ事ある者なれば天坪の剩糸の處を押へるやうにす可し自然に附く様になるなり若しも着き過る時は一の糸の下をスコグベし委しきは修業の上知覺せらるべし

元來サワリの着け方に依り太き音を出すあり細き音を出すあり細きは堅き音色丈けに止まり妙味を出す者に非ざれば可成丈太き音を出す事を勤むべきなり

而してまた彈方によりても太きと細きとあり是等は空氣に波及する理を辨へ深く彈方に注意するなれば直ちに會得する者なり

何故に太きを好むといふに音の太きは清爽にして妙なる味ひあり又遠音を出すは太きにあればなり

今茲に調子の性及四季調子の要を摘記せば左の如し

双調、　黄鐘、　一越、　平調、　盤渉、

双調は――――――木――春のごの聲

黄鐘は――――――火――夏齒の聲

一越は――――――土――土用きばの聲

平調は――――――金――秋舌の聲

盤渉は――――――水――冬口びろの聲

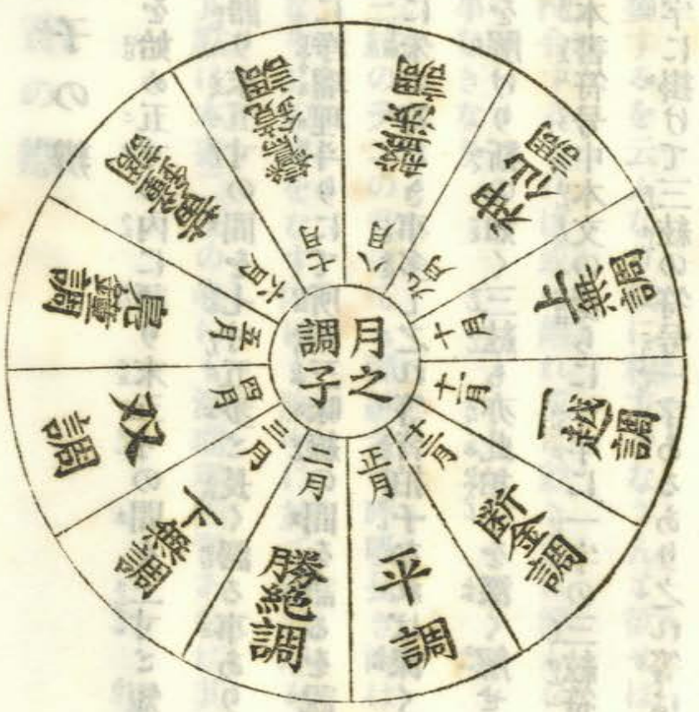
（三絃之に準す）

右は調子の性にして呂律は天地の道理に基く者なり即ち呂の音はよろこびの音とするなり夫は天には樂み多きによつてなり律の音はかなしみの音とするなり夫は地には苦み多きに依てなり

（四季調子）

春は　双調　夏は　黄鐘　秋は　平調　冬は　盤渉　土用は　一越

今茲に十二時の調子を圖解せんに左の如し



拍子の辨

譬へば高壹尺の者を始め五寸の内に語り末五寸の間を三寸と短かく語る事あり又始め五寸を二寸五歩に語り末五寸の間を七寸五歩と長く語る事あり之等は皆三味線の合の手又はあしらひ共に淨瑠理斗りにて所謂三味線の間を語るを説けるなり本書符号中平假名字の本文の脇に朱の符なき事多し之れ等皆拍子なれば深く考ふべし

以上淨瑠理の拍子を解けり斯の如く三絃も亦此拍子を深く解せざれば所謂ふぬけ三味線となるなり例ば本書符号中本文の傍らに一字に一字の三絃符号あるあり又三字あるあり又上の字と二字に掛けて三絃の符号一字あるあり之れ等は皆拍子に依て其連絡となり始めて義太夫節の相方ともなる次第なれば黑字の本文と朱章の絃符とを深く考ふることこそ獨習者の拍子を解する所以なれ

相方の辨

抑も相方なるものは通常人間の意氣相投じて朋友の親み深きが如く語り人と彈絃者と息の相同じき事を要するを云ふなり故に相方をなさんと欲せば先づ語り人の呼吸を量るべし呼吸相互に投合するなれば或は離れ或は就き或は浮かれ或は沈むも語り人と彈絃との會合を缺ぐ事なきなり

今呼吸を説かんに三絃のテンの音にても彈絃者の呼吸長き時は語り人又アーと應じて呼吸を長くす可きなり又相方をなす内にも胸中に於て淨瑠理を語り間接に語り人を助くべき要あるなり其點は本書二三の巻にも淨瑠理獨習あれば其の辨に就いて親しく研究すべし

發音の辨

第一　語音

言葉は聲音を綴りて成ることは云ふ迄もなきことなれど淨瑠理に於ては語の音數及び類似の音等その差別をよく心得をき而して其言調を整へ又音數に律し以て義太夫の一派を立し者なれば必ず斯道に熱心する諸士は先づ五十音の配置順序及び動詞の變化に大關係ある事を講究せざるべからず左に其大要を述べん

吾人が口に唱へ得る音は正音五十と擬音二十六音とあり正音五十を又唯五十音とも稱す左に古來一定せる音位の圖を參考の爲めに掲ぐ圖中縱の音を（行）と名づけ其首音を取りて（あ、い、う、え、お）の五音を阿行の音と稱へ（か、き、く、け、こ）の五音を加行の音と稱す又横に列する筋を（列）と名づけ之れも首音をとりて（あ、か、さ、た、な、は、ま、や、ら、わ）の十音を阿列の音と稱へ（い、き、し、ち、に、ひ、み、い、り、ゐ）の十音を伊列の音と云ふ此他諸行列の音皆之れに準ず

一段　二段　三段　四段　五段

第一行　あ　い　う　え　お　以上を阿行の音と云ふ

第二行　か　き　く　け　こ　以上を加行の音と云ふ

第三行　さ　し　す　せ　そ　以上を佐行の音と云ふ

第四行　た　ち　つ　て　と　以上を多行の音と云ふ

第五行　な　に　ぬ　ね　の　以上を奈行の音と云ふ

第六行　は　ひ　ふ　へ　ほ　以上を波行の音と云ふ

第七行　ま　み　む　め　も　以上を麻行の音と云ふ

第八行　や　い　ゆ　え　よ　以上を矢行の音と云ふ
第九行　ら　り　る　れ　ろ　以上を良行の音と云ふ
第十行　わ　ゐ　う　ゑ　を　以上を和行の音と云ふ

阿列　伊列　宇列　江列　於列

此十行五段の音は決して此位置を濫るべからず淨瑠理は皆此音の位置に就いて其法を語るべき便宜あればなりされば同音の字あればとて彼是を混ぜざる樣注意すべし

凡て右の五十音は古代の人は箇々別々に唱へ分けて彼是れ類似する事なかりきと云へり先代の長登太夫の如き識者の賞感する所なりき今日に至りては往々類似の音を同聲に唱へて區別すること能はず之れ素人の訛言を發する所以なり偖て類似の音とは左の三行の音なり

阿行　い
矢行　い
和行　ゐ

う　う
え　ゑ
を　を

右に掲げし伊列の（い、い、ゐ）の三音は口に言分くる事甚だ難し次に宇列の（う、う）の二音も江列の（え、え、ゑ）の三音も於列の（を、を）の二音も皆口語として區別し難きものなり然りと雖も淨瑠理を語る時のみならず平常の語にも實は正しく唱ふるを可とす而して其區別を云はゞ（阿行の音）は凡べて輕く（矢行の音）は聊か重く（和行の音）は大に重きなり

阿行　い　いかなる。う　うすき。ゑ　ゑにし。を　をもひまわせば
矢行　い　い—んうんたる。え　いえさつさ

和行　ゐ　ゐんぐわ

是等の事は發音及び綴字法を學びたる人は能く知る所にして今更贅するの要なけれど之れを明かにせざる爲めに義太夫の彈手に迄訛をなすことあり今例を下せば左の如し

たまゝあへば　あひふがら　と彈くべきを

右を

たまゝあへば　あひふがら　と彈く如し

右を

いふもつきせぬふみだふり

一せも。さんせも女夫じやと

右を

一せも。さんせも女夫じやと

是等只に一せもと同音に言へばよきなり然るを一こあげてせと緩め而る後にもを振る如きは實に聞き苦しきことの限りなり

以上五十音の外に擬音二十六あり即ち左の如し

加行　が　ぎ　ぐ　げ　ご
佐行　ざ　じ　ず　ぜ　ぞ
多行　だ　ぢ　づ　で　ど
波行　ば　び　ぶ　べ　ぼ
波行　ぱ　ぴ　ぷ　ぺ　ぽ

此二十五を濁音といふ

此外別に（ん）片假名にて（ン）と云ふ鼻音あり之れ常に義太夫に用ゆる吐息にして腹中に息を籠むる時は必ず此音に基くべきなり

偖て淨瑠理に於て第一多く用ゆる發音は前述音數の中、（あ　い　う　ゑ　を）の五音なり此五音は腹音なり他の音は皆此行に戻る者なれば腹からして語る事を要す即ち（か　き　く　け　こ）は奥歯の音にして（ふ　に　ぬ　ね　の）は舌音なり（ら　り　る　れ　ろ）は舌の根の音にして（さ　し　す　せ　そ）は齒音なり又（ま　み　む　め　も）は唇音にして（は　ひ　ふ　へ　ほ）も唇音なり今頭字咽音又は齒音其他の音を發するも直ちに腹音に戻る者なれば發音の原理に鑑み明朗なる聲を遣ふべし

然る時は大に聽衆の感動を促すものなり今假りに奥齒音の（か）を語らん最初は奥齒の處より（か）の音を發するも直に（あ）の音に歸する如き之なり餘は推して知べし

次に頭に用ゆる字と尾に附く字と中につく字とに依り發音を注意せざる可らず此注意なき時は常に非言となる事多し今一例を記せば左の如し

餓鬼に成て　こいふが　は重き言ひ方なり

熊谷といふ　くまがへのが　は輕き言ひ方なり

往々くまがへのがを重く押付ける人あり誠に聞苦しきものなれば之に習ひ他は推して考へ訛言及び非言を誡むべき事は淨瑠理の主要と知らるべし

前記口中開合を再記せば左の如し

あいうゑを　腹喉に應ず

かきくけこ　奥歯に應ず

さしすせそ　歯に應ず

たちつてと　舌に輕く應ず

ふにぬねの　舌に重く應ず

はひふへほ　唇に輕く應ず

まみむめも　唇に重く應ず

やいゆえよ　音を鼻に近からしむ

らりるれろ　舌の根より出づる

わゐうゑを　鼻喉に應ず

ゐを　口をすぼむ

ろ　舌を出し口を中に開く

う　歯をかみ口をほそむ

ゐ　歯をかみ唇を開らく

わ　歯も唇も開らく

第二　音便

淨瑠理の語は前に掲げし七十六音を彼是聯綴して出來たるものなるが其聯綴の法に音

便を始め　略音、約音、通音抔の諸則あり先づ音便より述べん

音便とは連音の便宜即ち　白き　黑き　と云ふべきを口には多く　白い　黑い　と唱へ又　寒く　暑く　と云ふべきものをも　寒う　暑う　と唱ふる類なり左に一例を掲げん

「き」音と「し」音とは轉じて「い」といふ音に響くことあり卽ち

きさきの宮　……を……きさいの宮

たきて（於）……を……たいて

つきて（就）……を……ついて

かきて（書）……を……かいて

「き」を「い」と云ふは音便として差支なし然るに往々誤りて（於ひて）（書ひて）と故事つける人ありこは誤りなり

よし（善）をよい　わるし（惡）をわるい　ちかし（近）をちかい　ちかい

ことほし（遠）をことほい

と云ふ事あり之れも（近ひ）（遠ひ）と故事付けるは惡し

（以下之れに倣ふ）

み音とび音とは多く鼻孔へ洩して（ん）と云ふ撥ぬる音に轉ずることあり之を撥音便といふ

とみて（富）をとんで　くみて（汲）をくんで　かみて（嚙）をかんで　のみて（飲）をのんで

又び音を（ん）と撥ねて唱ふる例あり

とびて（飛）をとんでよびて（呼）をよんで

といへる類なり是等は其音便として差支なし

ち、り、ひ、の三音は語勢の便宜に依り急促に唱へて「つ」といふ如き音に轉ずるあり之れを促音便と云ふその例は

たちて（立）たつて　うちて（討）うつて

かぎりて（限）かぎつて　かたりて（語）かたつて

おもひて（思）おもつて　むかひて（向）むかつて

と唱ふるが如し之れ等當座淨瑠璃に用なき樣なれども大に然らず各々正しき音を心に持ち語るに於ては上品なるものなればなり

第三　略音

略音の語また約音の語などは古代のみならず現今吾人が使用する言語にも數多ありて常には何とも心付かで他人に問はれ抔して往々何の故に斯くは略しも約まりもするかと我ながら疑惑を起すふしもあり然るに能く考ふれば其略かり又約まりするに各々通則のあるなれば茲に聊か其由を辨ぜんとす是又心得置くべき事なればなり

略音とは幾つかの音を綴れる一語の内自然と一音の略せらるゝものを云ふ其規則とする所は左の如し

一　阿行の五音　（あいうえお）

二　伊列の十音　（いきしちにひみいりゐ）

三　良行の五音　（らりるれろ）

右三條に掲げし諸音は自然と省略せらるゝこと語例數多あり

やまあがた……を……やまがた（山縣）
てあらひ……を……たらひ（器物の名）
あかいし……を……あかし（明石）
ほしいひ……を……ほしひ（乾飯）
なるうみ……を……なるみ（鳴海）
たのうへ……を……たのへ（尾上）
ふとたり……を……ふとり（太織）
みちのたく……を……みちのく（陸奥の奥）

斯の如く（あいうゐえお）の五音が自然と省略せらるゝは畢竟阿行の音はあらゆる音の中にて腹音なれば隙りなく尤も清淨なるが故に多き綴りの中にても此音ばかりは略かりても差支なかるべし

やなぎかわ……を……やながわ（柳河）
こきむらさき……を……こむらさき（濃紫）
やまし か……を……やまが（山鹿）
あしふみ……を……あぶみ（鐙）
かぢとり……を……かごり（楫取）
はちす……を……はす（蓮）
かにば……を……かば（樺）
くにす……を……くず（國栖）
はやひと……を……はやと（隼人）

いひぼ……を……い　ぼ　（疣）
ゆみつる……を……ゆ　づ　る　（弓弦）
しらがみ……を……し　ら　が　（白髮）
かりの……を……か　の　（狩野）
まがりたま……を……ま　が　た　ま　（曲玉）

以上掲げし例の如く伊列の音は悉く自然に省かるべきものなり中に『矢行』の（い）と、『和行』の（ゐ）この例證見出でざれば和行の音はすべて重く響く故に省かる事なきなるべし、又矢行の音は輕清なれば省かるべき筈なれど詞少くして其例証を探り得ざるに因る

なぞちふ……を……な　ぞ　ふ　（準）

さらば……を……さ　は　（對話語）
かへるさ……を……か　へ　さ　（歸）
あるべし……を……あ　べ　し　（中古の書）
たれが……を……た　が　（誰）
それの……を……そ　の　（其）
こころち……を……こ　ゝ　ち　（心地）
こころ……を……こ　こ　（所）

以上の例證に就いて全く阿行の音も伊列の音も良行の音も自然と省略せらるゝ由を知るべし、故に此通則の外を無理に略言して云ふ如きは斷然本文を失する者と云ふべし

第四　約音

約音とは言語の綴りの中にて二音が約まりて一音となれるものを云ふ一例を示さば（もちあぐ）を約めて（もたぐ）といひ（あらいそ）を約めて（ありそ）といへるが如し斯く約まるにも然るべき通則あり其中にて（阿行）音の他の音に重なりたる時二音の一音に響く事尤も多し其例左の如し

たゝきあひ……を……たゝかひ　（敲合）

さしあげ……を……さゝげ　（指上）

右の詞に就て見よ「き、あ」の二音が約まりて「か」となり「し、あ」の二音が約まりて「さ」となれり

わがいへ……を……わぎへ　（我家）

わがいも……を……わがも　（吾妹）

右は普通言葉にあらねば不審に思ふ人もあらめど古歌なぞにいと多き詞なり

かねうち……を……かぬち　（金打、鍛冶）

あらうみ……を……あるみ　（荒海）

右の詞も「ね、う」の（ぬ）となり「ら、う」の（る）と約まりしなり次に（ゐ）音に他の音の重りたる例を出すべきなれど甚た少き故例証を索め得ず

はたむり……を……はこり　（機織、服部）

にしきむり……を……にしごり　（錦織）

右は「む」と云ふ音の他音に重りて約まりたるなり

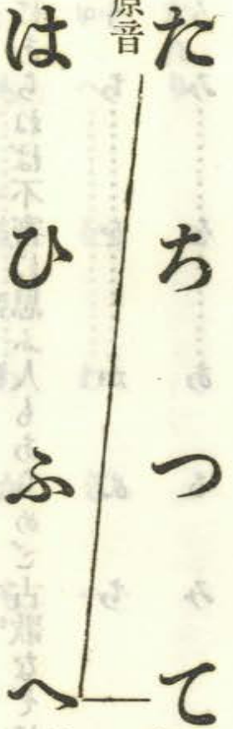
之等を通じて考ふる時は阿行音の他の音に打重なる綴りは必ず一音に約まる理由を悟るならむ偖て此約音は阿行音ならず他の音の二個重りても一音に約まる事あり例へば

「ひとつたぺ」（人傳）人つて といひ「このかた」を（こなた）な と云へるが如し、かく「た」「へ」の て となり「の」「か」の な と成る理由を次ぎに圖解して掲げん

凡そ二音の約まるを知らむには上なる音と下なる音との同じ行の五音を並べ書て見よ

上なる た は原音にして下なる へ は次音なり約まる音之れ歸音と云ふ

左の圖中 た といふ原音より へ といふ次音に移り次音と同列位の原音に戻るを歸音とするが如し



此の一例にて他をも推考せよ但し同音の二個重りたる時は如何との疑ひも起るべけれどそれも猶右の例に準じて心得べし

第五　延音

延音とは約音の反對にて一音の二音に延ぶるものをいふ其の内「加行」音を語尾とする詞と「波行」音を語尾とするとの別あり

加行音を語尾としたる延音語の例は

い　ふ……を……い　は　く　（曰）

ま　う　す……を……ま　う　さ　く　（申）

た　も　へ　る……を……た　も　へ　ら　く　（思）

などの類にていと多し又波行音を語尾としたるは

ゑ　み……を……ゑ　ま　ひ　（笑）
な　げ　き……を……な　げ　か　ひ　（歎）
か　く　す……を……か　く　さ　ふ　（隱）
ち　る……を……ち　ら　ふ　（散）

などの類なり然れ共かく一音を二音に延べたればとて詞の意義に變化あるにはあらず抑も約音延音の如きは殊更心得置かねば淨瑠璃は勿論歌謠など其音調を整へ又音數に定律あるものを作る能はざるものなれば之れを學ぶもの亦理解し置くべきものなり讀者乞ふ鑑みられよ

第六　音通

音通とは是れも定まれる規則ありて五十音中の同行相通じ同列互に通ふものをいふ例へば「ち、親」を「て、親」とも云ふは同行の通へるなり「けぶり」を「けむり」とも唱ふるは同列の通へるなりしかるを音通にも合はぬ意外な言を發するは眞の淨瑠璃を學ぶものに非ざるべきなり

同行音通

同行音通は同じ行の音の彼れ是れ相通ずるものなるが其中に「江」列の音の「阿」列に通ふ詞尤も多し但し之は二言を連合して一名詞に唱ふる時に限れり

其例は

た　け　や　ぶ……を……た　か　や　ぶ　（竹藪）
か　ぜ　く　る　ま……を……か　ざ　く　る　ま　（風車）
て　ま　く　ら……を……た　ま　く　ら　（手枕）

かねもの……を……かなもの　（金物）
うへつゝみ……を……うはつゝみ　（上包）
あめがさ……を……あまがさ　（雨傘）
ひにみづ……を……ひやみづ　（冷水）
むれとり……を……むらとり　（群鳥）
こゑいろ……を……こわいろ　（聲色）

などの類なり此外にも同行音彼れ是れ樣々に通へり

きのは……を……このは　（木葉）
ひかげ……を……ほかげ　（火影）
いづく……を……いづこ　（何處）
ゐやまひ……を……うやまひ　（敬禮）
しろゆき……を……しらゆき　（白雪）

かゝる例猶多けれども本書の目的にあらざれば略しぬ

同列音通

同列の音の相通ずる中にて「波行」音と「麻行」音との全然相通ずる詞殊に多し左例の如し

たはふれ……を……たはむれ　（戯）
へび……を……へみ　（蛇）
こぼしび……を……こもしび　（灯火）

此の他の音にて同列相通ずる例を聊か掲げんに

あ。れ……を……わ。　れ　（我）

う。め……を……む。　め　（梅）

などの類なり之にて音通の概要を悟るべし

以上説く處五十音を明らかにしたれば偖て之より淨瑠理發音の符號本書に黑符にて記載しあれば之れが符號の辨解を示さん尤も赤き章は皆な三絃の手なれば両符對照すれば淨瑠理の語り方も自然判明すべし

義太夫節の名稱及び三絃符號

入　ぬケ　と彈くをいふ

矢　ぬ　の聲を云ふ

ナ　キ　ー|ヱケヱケヱケぬ。ケぬケ。つ、ユ、ユ、ユ、と彈くものにして略符は〃に書けり

下　モ　リ　ぬ、ケぬつ、ユ。此の略符〆に書けり

上　モ　リ　ユ、ー、ユ、ユ、此の略符モに書けり

四　間　は左の如し

ヱ、ヱ|ヱ、ヱケヱ、ヱ|ケ。ヱ、ケぬケぬつぶ

ヲ　ル　とは節のゆりをいふ三絃にては　ヱねヽ　と彈くなり此符を略して　ヿ　と書なり

ヨ　ビ　男の分　つつつつつ。つゑねつムい。ねい

女形の分　ろ、、、、ろつ。つゑつゑ。ゑ、——

ウ　フ　シ　——。いちいいい　ろ　モ　ろ　ろ　ろ　ろ

ハ　ヅ　ミ　とは合の手に　ニりカン。　モルカン。　と彈く如き是れなり又

打連て　こそ　いで　て

ゆく　モいろ　此手もあり段中に悉くあれば茲に略す

ヒ　ロ　イ　そこよここよとかけまわり

右の如きそ、こよ、の如き一口毎にしきる故に其名あり

長　地　みもかねあとにとつをいつ

フ　シ　ハ　ル　いさむあとばの

行　義　うちいり　わるくうちしほれ

ツ　ク　フ　シ　む祢なでおろし

クルヽ上　五ざう六ぶを　ゑぼりしぞ

三ユハリ　あらはせり　や

四ユリ　おとりかご　此略符は　五　なり

九ユリ　たえいるばかりなげきし

が

駒太夫　三ユリ　むしも　あはれを

三重　そへ　ま　けり

道具カヱシ三重

右の道具カヱシは操の道具立を替ゆるを以て名づけり

節　尻　此略符はなり

ヲロシ

中ヲトシ

もろ、、、、定間、、、、ヒ以

おそれ——　いつたるばかア

いいね。ムムねいねもも、——　キ㊥いいろ。

りなり

みをなげふゥし　ぜんごム

ちやうた——い——。イ——。なきし

モ——。ろ〜〜モいニニ、いいモモもユンもへせセ、——

づ——　む——

ハリマ

ユリ流シ

中節

道具屋カ、リ

道具屋

なんとやらしてなんとやら

みのゆくをそぞぜ——ひもなア

き

えぞかるう　き　なみだ

かひがひしく

だいなしの——

小ヲクリ　うめがか

ウヲクリ　なげき―の

ギンヲクリ　まごとを

イロヲクリ　一まへ

アミダヲクリ　ふけゆく

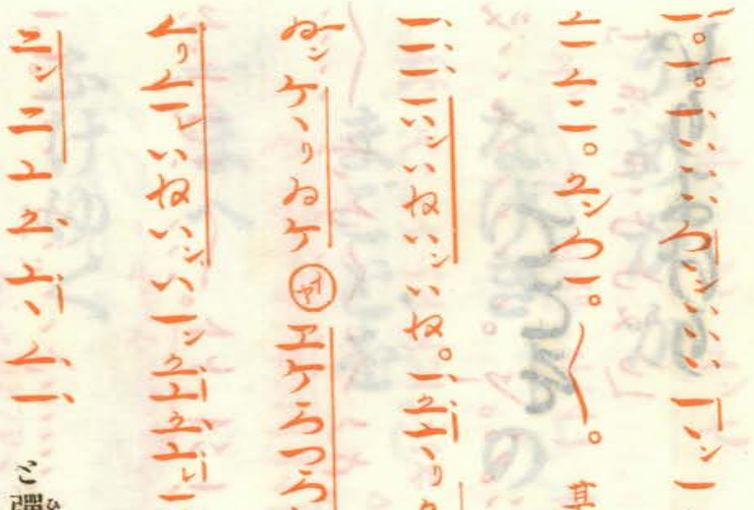
中ヲクリ　ともなひ

合一三ヤ一。ヤ一。一一一

別ヲクリ

鹿ヲドリ

スエテ



其次ギ前同ジ

中ユ の符号あるは多く此の手を略したるものなり

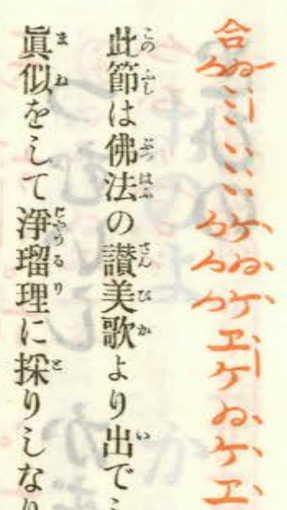
ご弾く如き手を總稱するなり書

セッキヨ

表具

江戸

林清



此節は佛法の讃美歌より出でしものにて之を歌ふ説經師の眞似をして淨瑠理に採りしなり故に中古の節と知らるべし

につぽんごくのそのかに

右の合手を彈くをいふ

だいもくをともヲ、ヲ、——

ケエねケ〜つ。ゐ〜つ〜セエ〜〜〜〜〜リカン〜〜〜〜〜

以上は節の大略にして同じ名稱の節も時と場合により大同小異あれば段物につきて見らるべし

右の大落しなるものゝ彈方は繁雜にして初學の者の覺へ兼ぬる樣なれども其意を解するならば捷徑にて覺へらるゝものなりさて其意を解するには此手を發明せし由來を講ぜざる可らず此由來に就て傳ふる所に依れば往古は大泣に落す手も皆文彌落しのみなりき而るを先の清七氏段物中大歎に沈む手不足に思ひ何か一工夫して聽衆に感動を與へんものと多年苦心の折柄或日の事とかや攝州天王寺合邦の辻を散歩せられしに見渡す向ふの畠中に於て若者一人農事を休み一心に淨瑠理本を開き頻りに首を捻ねりつゝ何かうめく樣なれば偵すがは斯道に熱心なる清七先生足踏み止めて彼の若者が何を云ふならんと耳澄して居る處に勢ひ込んで走り來る老人あり忽ち若者の傍に行き大喝一聲又もや淨瑠理を獨習する大痴者と既に天秤棒を持ちて敲かんとする刹那若者は本を携へし儘坂下へと逃出すを跡より彼の老人が今日こそは赦さじと追ひ驅け暫く走り合ひたる結果互に氣息疲れて歩も進まざる有樣を見るに忍びず中裁せんものと跡追ひ行きしが老人は怒の止み兼ねてや又も棒を携へて追驅る両人氣息奄々として休みては走り走りては休み果は岳の麓にて双方疲勞極りて倒れければ先生上よりこれを眺められ物事の押し詰し勢はさこそならめと感じられその勢をその儘に三絃の彈手として大落しなるものを發明せられしといふ故に彼の足音及息遣等を心に籠めて彈くならば眞の大落しとなるべしこれ等の例話に鑑みて鍛練あらば其妙境に進むも難からざらん之れに類する例話かず〳〵あれども後の卷に讓るこゝなしぬ

義太夫獨習新書壹の巻説明終

佐和利の手解

二十四孝

十種香

こんなとのごとそひぶしの。みはひめごぜ
の〜くわほうぞと。つきにもはなにもたの〜
みは。ゑぞうのそばで〜じゆゑゆからのつけ
むりもかうげと〜なつたるか。ゑかうせふ

とておすがたをゑにはゝかゝしはゝせぬものを。たましひかへすはんごんかう。めいぐわのちからもゝあるならば。(ヤ)かあいとたつたひとことの。おこゑがきゝたい　きゝたいと。ゑぞうのそばよ。(入)みをうちふしりうてい。(中ブシ)こがれみへたまふ。

八陣本城

「そのおこゝろとは、つゆゑらぎ。(合)みやこでおわかれ　まうしてより(ヤ)ィ、、、もつたいないことながら。(合)とゝさまやはゝさまをおもふあんじは(ヤ)ア、、、、どこへやら。(合)あなたのことがくよなつて。ほん

よ　ねたまもわすれかね　あひたい　みた
いと　あけ　くれよ。合　四ッ間　こがれゐたふてゐ
るものを。きこえませぬとむをめぎよあと
や。いふさきなる「う」らみごと

日吉丸　三

「とはいひながらなさけない。「ム」すぎしあふ
よのむつごとを　みに、ゐみぐと。かた
ときもおもいわする、ひまもなふ。とし
きへだつそのうちに。うつりやをきは　と
のごのこゝろ。合　もしやみをては
なされぬかと。ほんにあらゆる。かみさま
や、ほとけさまでむり〜いふて。合

あんじくらしたかひもなふ。そはれぬぎり
のりべつとは。あんまりむごいと、とりつ
いて　なみださきだつ　くど　きごと。

忠臣藏茶屋塲　クドキ

おかるは〜しじうせきあげく〜。合間たより
の〜ないはみのしろをやくにたてたのたび
だちか。いとまごひにもみへそなものと。
うらんでばつかり〜おりました。合
もつたいないは　と〜さんの　ひごうの
しでもおとしのうへ。コ　かんぺいさんは、三
じふになるや〜ならぬに、、しぬるとはさ
ぞ　かなーかろくちおしかろう。　あひた

かつたであろふのになぜ。あはせてはくだ
さんせぬ。おや〜をつとのしやうじんさへ
ゑらぬわたしがみのゐんぐわ。なんのい
きておりませう。おてにィ、かゝらば、かゝ
さんが　おまへをうらみなされませう。じ
がいしたそのあとでくびなりとしがいな

りとこうよたつならこうよさんせ。さら
ばでござるあにさんといひつゝかたなとり
なほす。

朝顔日記

宿屋

ひとせうぢのほたるがりよ。こがれそめ
たる〜こひびとゝ。かたらふまさへなつの

よの。みじかいちぎりよほいないわかれ。
ところたづぬるたよりさへ。おもふよまか
せぬくにのむかひ。汎おやくよいざなは
れ。なにはのうらをふなでーて。みをつく
ーたるうきおもひ。ないてあかーの、かざ
まちよ。たまくあひはあひながら つ
れなきあらーよふきわけられ。合ちりぢりくに
へかえれば ちゝはゝの。汎おもひもよら
ぬつまさだめ。たつるみさををやぶらじと。
やーきをぬけてかぞくの。うきめをしの
ぎみやこぢへ。のぼつてきけばそのひとは。
あづまのたびと、きくかなしさ。またもみ

やこを。まよひいで いつかはめぐりあふ
さかの。せきぢをあとよ。あふみぢや。み
の、をはりさへさだめなきこひしくよ
めを なきつぶし。もの、あいろもみづと
りの。くがに さまよふ かなしさは。
合四間 いつのよいかなるむくひよて。かさね
くのなげきのかぢ。あはれみ たまへと
ばかりよて。こゑをしのびて な
げき ける。

妹脊山

たかいもひくいもひめごぜの。をつとと
いふはたつたひとり。けがらはしいはたま

のこしなんの　はゝも　うれしかろ。しうげんこそせね。こゝろばかりはくがのをけが。やどのつまとおもふてしよや。それほどよおもふなか。いちよちはんときそはしもせぞ。さいのかはらへやるかいのと。ひきよせ〳〵ひなとりも、ひざよとりつきいだきつき。かたじけなさとうれしさをあはでわかるゝなごりのなみだ　ひとつよおつる、みつせ　がは——。

せんねんも　まんねんも——。かはらぬちぎりとおつしやつた。そのやくそくはいつはりか。うきよのわ——けも〳〵、

――わき　ま　へぞ。ざいしよ、そだち
のわたしでも。いひはしたこと、、、、
、、、、わすれはせぬ。あんまり　むごい
と。とりつ――いて　なみだァ、さきだつ――
う――らみ　ごと

太功記　二

いまさらいふも　はづかしい　な――が
ら。こぞのはつはるらくとうのぢし
ゆ、の。おゝは――の、はなさかり
こしもとどもよ。いざな――は――れ――ねが
ひかけまくはつこひのいろも　かもある
との〜ごぶり。くわんをんさま

の　おなかだち。合エケエサエケゐケいゑゑ　たがひのむね
の、うゐしたひもも。ついん　とけてうれしいよひま
くら。ゑゑ　かはるまいぞのおことばがをぐよ
こゝろの　せい――しぞ――と。ニ割　かたとき
わすれぬにようぼうが。おそばよゐるがお
いやならいつそてよかけたまはれと。ぴん

とをねきの、いとざ　くら　はなも　み
だるゝ　ふぜ　ふ、いなり

蹙餞別

「をつとの、ことばよ、はつはなも。合エエエンムムムムムムムム
つきそふわたしはをなごのみ　ちから　よ
おもふぬしのみは。うりつゑゐねいねいセゐゐ　こしひざぬ

けて　あしなへと。　なり　やつれたる
ふうふが　るろう。合　たくはへまで
つきはてゝやどり　さだめぬ　たび　の
そ―ら。四段　はてゝらかはのみちのくよ。
さまよふたりがみよあまり。　かさね
くのごかうおん。しんでもわすれはいた
しませぬと。　ふしおがむてよ、　おくつゆ
の　なみだよまこと、　あらはせり

質　屋

たかいも、ひくいも、ひめごぜ――の――。
合　はだふれるのはたゞひとり。　お
やきやうだいも　ふりすてゝ。

、、、

ぞ　いつそころして。たもいのと。ひざ
よ。うちふし　しやくり、な　き
。ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ。
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ。

三浦別

みじかい　なつのひとよさよ。ちうぎの
かくることもあるまい。これほどまでよつ

きしたふ　わたしが。こゝろ。おもひ　や
つてくれ　もせ　で。――　こゝろつよ
やとひおどし　よ。うらむらさきの　い
ろ――ふかき

安達原　三

まうし、くとのびあが　り――

みれど　めくらの　かきのぞき——はや
くれすぐる　かぜよつれをりからしきり
よ。ふるゆきふ——みいぬ　ぬれさぎのあ
しがき——や。（合四間）　なかをへだつるしろ
たへも、てんとうさまのおよくしみ。うけ
し、このみいいといねど。やうをきかねば

なんぼでも。いなぬ〳〵どなくこゑも
あらしと　ゆきようづもれて。きこへぬ。
ちふと　うらみなき。

千両幟

をまふとりををとこよもち。にどながさ
き　くにぐよへ。　ゆかしやんをりやそ

のあとの。るすは　ふほさらをんぶぎの——。
ひとり、くよ〳〵ものあんじ。　をつ
とよけがのぶいやうよと。　いのる——。合
かみさまほとけさま。　上めうけんさま
へしやうじんも。もどりやしやんして——
かほみるまでいもつ。あんじてよをねぬ　よ

ようぼうが。合四間いまこのせつふるくるし
みを。つれそふわたしよいはしやんせぬ。
おまへはそれほどつれぶいと——めうとよ
ふつたいままでを。かぞへたて〳〵うらみ
ふみだよ——ときうつる

御所櫻

あまたとまりの、そのうちよ。二はちあまりの〜ちごをがた。こつちよおもへばそのひとも。それつ　もつれつ——。あひおひの。合
まつとまつとのわかみどり。つゆのちぎりが　ゑんのはしゑ、はづかしや　つひくらがりの　ころびねよ。合
つらやひとのあしおとよ。こひびとも　おどろき　て　おきゆくたもと　ひかゆるを　ふりきりいそぎ、ゆくひやうし〜、——合
ちぎれてわがてよのこりしは　この〜ふりそで　かりねのふさけはあさけれども　いもせのゑんや

ふかかり——けん。

彦山權現

ホイ　たつとばかりよどふとざし。こぶしをよぎり〜くやみなき。そのはどりわけかなしさをやるゥ、せ　なみだの——くどきごと。ほんよりきよといひがら。みよりきごとのかくばかり。合　かさふるものかちゝうへの。かたきをねがふ　かどいでよかあいやおとは　まうもくの。まゝならぬみを　くやみじ——ホ。あとよみすてゝ　ふるさとを——いづるも　ちりぐはなれ　ばな——れ——。ありかをさが

をそのうちよ。かなしやいもとも つる
ぎのなん。ちゝうへのみか つそもらやそ
も ふたりみたりが あぢきない。つるぎ
のしもと、きへ〳〵のこ―る―はゝとわた
しが うきくろう。合てゐ。ゐてゐ。ゐてゐ。つらいかなし
いはづかしいなりも、かたちもいとひなく
あめつゆ。ゆきのみやまぢや のぞゐよ、ゐ
ある〳〵 ひとつやよ。合ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ もしやかく
れてゐやうかと。ゐ。ゐ ひとなきみちふ ひを
くらし さまよひ ありく、おやとこが。
たよりないみのうへもなき たよりのひ
とよ めぐりあひ、わたしがこゝろのお

くそこを。あかをは二せのわがをつと　か
ならずみをてゝくださんをなかあいとお
もふて　たまはれと　くどき　なげいてふ
ゝしづむ

本藏下屋敷

かくと。しらはも、さくはなの。もゝの
井わかさのをけのいもうとみち　とせひめ。
ゝたひこがるゝぬいのをけよわかれ　ほ
どへし　ものおもひ　めよは　なみだの
たまをだれ。　あけてひとまを　たちいで
て。　かまのよえおと　みゝよとめ。
あのもずやのよえおとは。まつかぜよに

しとやら。いにしへすまへるざいの　ゆき
ひらきやうを。こがれしたひしまつかぜが
かこちぐさ。あはれふきへしうきみとや。
ぬいのをけさまとこのみちとせが。みよひ
しぐ〳〵と。かたと――きも　おもひあふよ
の　にひまくら　かはすたがいの　ことの
はも。あさつきのまゝ　きぬ〳〵よ。
おわかれ　まうしたそののちは。こゝよ
つきゆきはな〳〵　かはど。かをみ〳〵が
せきと――ひきわかれ。いつかやし
きへ　かへるかり、、、、、、ふみの　たよ
りも　おと〳〵づれも。なくは

かもめか　もゝ、ちど——り——合四間　つばさあ
るならとのさまの。おそばへゆきたいゆき
たいと——。ひとめなければこゑをあげ。
かこち　たまふぞ「ぢ」い——た——はしき

帶　屋

それが〜かなしさ〜わたしも〜をなご〜の、
はしじやもの。合　だい
じの、をとこをひとの　はな合定間　はらも
たつし合　りんきの、しやうも、まん
ざら　ぢら〜ぬ——でなけれ、ど　も。合
かあい合　とのごよ、きを
もまし。「わづらいでも〜でやうかと。あん

じをごして。なんよ——も、いはぜ。合ろつかくだうへ。おひやくども、、、——、どうぞをつとよあかれぬやう。おはんぢよらうと　ふたりのなさか　たゝぬ——やう——ふと〜。ぐわんだても——。はかない、をな〜ご——の　こゝろねを。

ふびんとおもふていつまでも。みをてず、そふてくださんせと。をつとのひざよ、うちふし——て。くどきたつるぞ。いぢ——らしき

城木屋

そりやきこへませぬ〜さいざ〜さん。お

まへと、わしが、そのなかは——きのふや
けふのせわ——ことかいな。合ものもるんこと一いも。いたつたやし
きまつとめたそのうちまふつと。合エンゴ。
みそめて——ヱ、ヱ、ヱ、——はづかしい。こいのいろはをつたもと
からそつと。わたしゝがこゝろでは。
合ケンつけりンつつンつつ。トン てんじんさまへぐわんか
けて——うめヱ、を一しやうゥ、たつたぞ
へ。合ヱンゝこゝこゝこゝそのおかげやらうれしいへ
んじ。二せも三せもさきのよかけて、ち
かひしなかァ、じや——ないかいイ、ホ——
こよひのことをゑらせまし。とひだんか

ふもせふものと――まちかねてゐるゥ、、もの
を。四合あんまりむごい　あいそづかし。たゝいてはらがいるならば――こゝろまかせよしたらへで。もふかんゑんをしてやるとっいふてたんのうさせてたべと。をとこのひざゑをがりつき。よそをはゞかるしのびなき　ゑんじつみへ――て　いぢらゑし。

菅原傳授寺小屋

四間ノヨビ　みだいわかぎみもろともよしやくりあげたるおんなみだ――めいどのたびへてらいりのしゑやうはみだぶつしやかむよ

ぶつ。六だうのうけのでしまふりきいの
かはらでをふでほん　い、ろ、はかくこを
あへ　ふくも――ちりぬるいのち　ぜ、
ひ、もふや――合ムねいルンいイつるンケリミエケぬりくくケニエ。ろつム
あをのよたれか　そへぢせん　らむうゐ
めみる　おやごころ。合ねケエケぬケレつム　つるぎとし

でのやまけこえ。合サエサエケぬケレつム　あさきゆめみ
しこふちして　あと――ヲ、、、、つねエ　は――かどび
ま　ゑ　ひもせ　すウ、ウ、、ウ、、ウ、――京は
こきやうとぬ　たちわかれ　とりべのケ、さし
てュつれてゆく

作り替の辨

作り替を同じ彈手にて符合せしむるには先づ其字數と手數とを對照斟酌せざるべからず手數と字數已に了知し得らるゝ時は容易に彈絃せらるゝものなり

今左に其例を擧げ獨習者の資に供せん

壇之浦魚物軍記

鯉責の段

はものあぢ〻ふかしといへども　これをを
らば　かまほこふらん。ふくのあぢ〻あさ
しといへど　これをくはば　あやしまん。

うを〻せいをることいこのりよひとし　さ
ればおさまるたいかいよ　ふまこひらめを
いましめの。みふそこきよき　りうぐうご
しよ　たうじかまをの　げんめいよ　した
がひ。合つ〻。〻。つ〻。つ〻。つ

だいなしとして「か祢てはうをのくしやき
ばん　みつばちの　はまぐりなく。ふかよ
くはるゝ　まをかつを。どぜうの　いわし
とかがやけり。合どうせきよあいなら
ぶ　いはながゑびゑもん　かよつら。なん
とさんごじゆのこんだてより　をぐさま
りうぐうよ「とびうをし。合ひ
れながの　じよやくとごうし　あくしびべ
い　このしろが。ありかをさがを　じやち
ねいかん　おもてはあんこうよみせかけて
おのがつめもてさしはさむ　こゝろのそ
このふたまたつめ「ふかのゐをかる　き

をごとは　きよろつくかほよ　あらはせり

玉藻前　三

のこらずきいておりました。ねぐらはなれしほとゝぎを。こでこよあらぬみづからを。このとしつきの　ごやういく。まだそのうへよ。いもうとまで。みづからをたを

けんと。さまゝのこゝろづかひ。おもいまわせばまわすほどそら、おそろしいみのめうが。むねよせまつてひとことの。おれいはくちへはでぬはいな　こんなうきめをみせまをもみな、みづからがいたづらから。とてもかなはぬ　こひゆ

ゑと。合四間 かくごはきはめておりまし た つ
ゆちりごおんもおくりもせぞ。 さきだちま
をるふかうのつみ。おゆるし、なされて、
くださりませ。合四合 うみのちゝうへはゝさ
まはどこゑどうしてござるやら。いのちの
きはゑたぶひとめ。 あふてしゑたい か

ほみたい これば つかりがとい ひさして。
こゑ 伊 くもらせば。 たつはなひめ 合二。ニ三二三ろ
のふきよくもないそのおことば。たと
へいづれのたねなりとも 屋 わらはがため
ゑはだいじなあねさま。おまへはころさぬ
みづからを。 イヤ のふそもじはながらへて。

たよりをくなきはふうへよおみや　づかへ
をたのむぞや。イヤ　みづからをイヤわらはと。
しをあらそひしおとゞいの　こゝろねふ
びんとはゝおやは。いづれをそれと　わけ
かぬる。むねはなみだの。みつせがは
ニハ。ムリガン。ニエエエ㊐ぬニエエニ、――ニ、半間
みもうくばかりリ、、、、なげき

しが。

合邦内

うそか、〳〵とはしもつてくゝめるやうな
はゝのじひ。ブウン　おもはゆげなるたまてごぜ
ん。はゝさまのおことばなれど。いかなる
くわこのゐんねんやら。ムハ　ゑゆんとくさまの

おんことは。ねたまも。わすれぞこひこがれ。合ねたまも。おもひあまつて、うちつけよ。いふてもおやこのみちをたて。つれなきへんじ、かたいほどヲ、なほ、いやまさる　こひのふち。いつそ、しづまばどこまでもと　あと　をしたふて、かちは　だし。合ちつりゝ

あゝのうらくなはがた。合ちつ

みを　つくしたる、こゝろね

を。合四角ふびんとおもふてともぐよ。ゑゆんとくさまのゆくゑをたづね。めうとよしてくださんをが。おやのおじひとてをあ

はせおがみまわればはゝおやも　いまさらあきれわがこのかほ。　たゞうちまもるばかりなり

三勝酒屋

あとよは、、、――そのが、うきおもひ。かゝれとてしもうばたまの。よのあぢきなさみひとつよむをぼれとけぬかたいとのぐり、かへしたる　ひとりごと。合　いまごろはをんひちさん。どこよどうして〜ござらふぞ。いまさらかへらぬことながら。わしといふものないならばあうとごさんもおつうよめんじ。こまでなしたるさんかつ

どの。とくよもよびいれさーやんしたら。たんひちさんのみもちもなほり。ごかんどうもあるまいよ。おもへば〳〵このそのが。きよ祢んのあきのわづらひよ。いつそ、ーんでしまふたら。かうーたなんぎはあるまいもの。合四拍おきよいらぬとゑりながら。みれんなわたしが、りんねゆゑ。合ぴぴぴぴぴぴそひぶしは、かなはぞともおそばよゐたいと ゑんぼうして。これまでゐたのがア、ア、、、ーおみのあだ。合ぴぴぴぴぴぴいまのおもひよくらぶれ、エ、、ト。エ、、。ばアこアーいち祢んまへよこのそのが。しぬるこゝろがエマ

つかなんだ。合四間こらへてたべをんひちさん
わしや。「げい」——このやうよおもふてゐると。うら
み〜つらみはつゆほども合四間ゐなかゐ〜をつと
をおもふゐんじつしんなほ、いやまさるう
き　おもひ

祇園祭禮信仰記　三ノ口

作者　淺田一鳥

しだいよふけるよあらしよ。「こ」かたむくつき
もうを〜くもりみのあかりさへはれぬよよ
「ふ」びんなるかなゐんさくはものもいはれぞ
みもかなはぞ。「は」たらくものはりやうのめ
よ。「な」みだはら〜おちこちのたつきも

ゐらぬ合たびぞうき合おんいたはし
やてるわかぎみ　じゞゆを　たよりちか
らぐさ。やう〳〵ふたどりつき河マア〳〵こゝ
でゐばらくと地くさをりしいて行義あしやす
め河まうし〳〵。このあとのおほさか
といふざいしよでとふたれば。きーのゝさ

とへもマア一り。あゆみもゐれぬおんかち
ご。さぞおあしがいたみませう。うばが、お
ふてあげまをはづ。かへつておまへよてを
ひかれさか〳〵なごかいほう。おゆるさ
れ、てくださりませへ。河イヤコレうば。おり
やあるくのがおもしろい。そなたはまだ。

あしがいたかさをつてやろ。きがわろかくをりをのみや。そなたがいまわづらやると。おれは。なんとせうぞいのと　地　うち　なみだぐみたまふよぞ。河ヲ、ようおつしやつて、くださりまを。うばいどつこもわるふもなし。わづらふことじやござりませぬ。したが。ぢびやうのしやくがむかさきへ。アイタ。

ア、イタ、、——。コレまうー。そこらよみづがあるふらば。たつたひとくちのましてたべ。ヲ、こゝよおとがすると　地文彌　くさ　おーわけてりやうのてよ。合　をくへど　くどばらくと。合　のこるは　つゆのた

まきはる。のちのあはれとゝらぬこが。合
いたいけなてのぬれ〜づく。「くちへい
るればァ、うれしや。汎きがたつきりとなりま
〜たと「地わかぎみのおんかほを。「つくぐ〜
とうちながめ。「いとしほやときよとてあ〜
かゞのごそうりやう。「てるわかぎみのおて
づから。「みづをたまはるありがたき。汎チエさ
だめなきよのなかや。くわほうといふもゝ
ば〜がうち。かりそめの〜おあそびよも「地
たまのこ〜よてくるまともち「ケ、かしづかれ
たまひ〜みが。「いまはのもせのくさのう
へ。「ねあやゝどんをのしとねとも。「つよ〜きの〜

よるのものとては。このうばがひざのうへ。
さぞや〜ゆめよもうつゝよも。むか〜の〜た
まのごてんとも。おもふてぎよしなるおこ
ゝろが。いちばいゝと〜うござるはと。ひ
ざよひきよせ〜。いだきしめ ひとめも。
ちらぢ〜〜ちげきー〜が。やう〜〜よ なみだ

をとゞめ。（コレ）まうし。おまへはさかーい
おうまれつき。いまうばがいふことを。よ
うおきゝ、なされませ。このゆくさきはわ
たしがおやざと。どうぞそこまでたづねて
いたら。きづかひ〜は〜なけれども。あくにん
の〜はびこるよのなか。も〜まつながよみ

つけられ。「ハ」おまへもわたしもわかれ〳〵よ。「ホン」はなれまいものでもない。（ヰロ）さをればいのちもふぢやうのせかい。をさなうてもよしてるさまのごきんだち。たとへてきのとりことなり。やいばの〜たゑなほるとも。ひきようなさいご、あそばをなへ。（キメ）かたきのなもたづねたうへ。にしのほうへてをあはせ。なむあみだぶつとおつ〜やるとノ。ごくらくからとゝさまが。むかひゑおいでなされまを。かならをわすれたまふなと。「ニ」いひきかをれば（いイ）うちうなづき。（ヰロ）汐ヲ、わをりやせぬ。ようおぼえている。ごくらくといふ

ところよは。とゝさまがござるなら。いて
あをふのふ、うれしい〳〵。それでもおれ
ひとりはみちをゑらぬ。うばもついてきて
たもと。わきまへゑつてもいとけなきまだ
をさなごのおろ〳〵ごゑ。うばも、つ
いていくわいのと。ひざゑだきとりだきし
めて。おく祢ゑいとぞのゝをゑのこ。むゝも
あはれをヲ、、、三。そへゑけり。きゝみ
ゝたつるどをのきざう。つぶての三にんさ
さやきあひ。くわんたがひなはうちふり
〳〵。汎ホウ、むろまちくさい。きやらくさい
と。あとさきよりひつぱさみ。汎コレぢよちう。

ふがたらしいよまひごと。おふれのあつた
おたづねもの。かねよをるのじや。サア あゆ
め、と。てをとればふりたらひ。わかぎみ
をおゑかこひ。汐ア、コレく。わたしやそんな
ものじやない。すみよしまゐりよひをくら
し。あしはつかれる。ヤア ぬかをな。たゞの

ひとならきやつたものをまつぱだか。この
ちつぺいめをひとじちと。たちよるくわん
たをとつてつきのけ。たしなむ一ト こしぬ
きはなしよらばきらんとみがまへたり。ソリヤ
ぬいたはと三にんが。てんでよきら
めくおどしのやいば。じゞゆはわかぎみを

つかといだき。あひても　ゑらばぎきりむ
すぶをんなとおもひあなどり〜。三にん
ゑかなのあしらひを。きりたて〳〵
ゑゑゑ。
こ〜〜〜〜〜
㋮ケ〜㋮ふふケケクヌ〜
三重
「おふてゆく。い〜〜〜きりあふをきを
かけぬけて。きざうは　あとへたちもどり。
をんなめはふたりよまかせ。こせがれめを

とらへんと。そこかこ〜かとかけまわり。
ほうびのかねよぎろつくめだま。またひき
かへをそのあとへ。合ろへセ四メ〜　てるわかぎみを
みう〜なひ。たづぬるじゝゆがをか〜よの
きぎ。「つ〜ながる」ゝち〜ほ。ちのなみだ
わかぎみさま。てるわかさま。このすぢを

まつをぐま。すみよーのほうへおいで。ャ。ャ。ァ、へんじのないは。もうまげてくださつたか。たぶーきられはなされぬか。わかぎみさま。いとさまいのふ。ヲ、くこゝまとりやうほうから。こゑをゑるべまざつぷりと。きつたとおもふたをりとをり。あひみたがひまどつさりと。まろぶををかさずのつかかり。せめておのれをたらいせと。二にんを一どま。ずたぐぎり。河ア、うきーやくほんもうや。これまつけてもわかぎみさま。てるわかさまはいづくまと。合ねミかかねかか。サエケねンケ一ートトトよべど。ケ、ね。つユニンく。ヲ、ヽ、ユ、ヽ、ヲ、ヽ、ユ、ヽ、ユ、ヽ一つね四合こたへもあらね

〜ふくまつのたおとをかたきかと。よわるこゝろをとり　なほし。きーの、さとのおやざとを――たづねんものとおもへども。ふかでよこゝろひきいりて。〜だいく〜よ。よわりゆく。いまぞちしごのだんまつまよはのあら〜よふきおくる。かくともしらずどをのきざう。うろく〜まなこで、いつきせき。こりやをんなめもくたばつたり。どうでもせがれはかくれてをろと。うろく〜きよろく〜まつのした。わらひきのけて。なんじやと。をかしながむるほ〜あかり。よひのじやうか

んめ。ものをぬかせとこみわらとれば。ハァこなたはかのたいしやうじやの。ァ、くわるいことはせまいもの。こなたよわかれたそのあとへ。百しやうどもがおほぜいきて。コレこのやうよぼうしばり。なにもかもみてゐたが。ほうびをずつしりけなりわいの。

ェ、なよぬかをぞい。をんなめはくたばるがきめはをらず。てぶりざごでうろつくわい。コレ〳〵コレ〳〵をらぬやつをたづ祢ふより。このなはといてくださつたら。そのおれいよはおれがとつた。こばんをこなたよしんじやうと。いふはみいよりおぼへのかねてば

やまなはをときほどき。（河ドレ）かねわたせ。
（イヤ）〳〵こゝまはもつてゐぬ。（アレ）〳〵まつのゑ
だのずつとうへま。いんまひよいとかくし
ておいた。あがりたふてもてあしがいたい。
どふぞこなたが。（ヲヽ）がてんと。まつのあ
らかはてが〻りま。のぼるをみをまーぼう

おつとり。なぐりなさけもうちなやせば。
まつさかさまま（コリヤ）どうをる。（イヤ）どうをる
どころかゝうするのじや。ようころそふと
しをつたなと。いふてはうちをゑなぐりを
ゑ。おれがゝはりまなりをれと。わがく
くられたぼうーばり。もとのまつへ、

く、りつけ。わらも一ッよようよた〳〵。
にぬかほはおのれがつら。さいはひこゝよ
さつきのめん。をつぽりかぶせるをりこそ
あき。合ゑりかんこゝろへせ。ゝメ　たいまつうちふり　百
しやうども。みつけられじとゐんさくが。
うしろへそつとかくれるとも。つゝつ　ゐらぬ

がほとけの　けむりより。合ゲエリカンキつゝりカンム
じやうかんうりのぬすびとめ。だいくわん
さまの、ぎよいがでた。ところのほうよ、
サア　おこなへ。いきながらのくわそうぞと。
ぱつともえたつけむりのひまさき。
ぬけでる　じやうかんや。このばの、ゐ

ゆびをあんばいよしたうちしてこそ
かへりけり

義太夫獨習新書壹の卷終

大正九年二月十五日印刷
大正九年二月廿八日發行

版權所有

大阪文樂社義太夫研究會編纂

著作兼發行者　大阪市東區船越町二丁目六十一番地　合資會社　大阪文樂社　代表社員　松原助四郎

印刷者　廣島市天神町十七番地　宮齋美

發行所　大阪市東區船越町二丁目六十一番地　合資會社　大阪文樂社
電話南二一九八番
振替大阪三五二一一番

東京市麻布区霞町十一番地
東京市小石川区表町十番地

東京堂　　**大阪文錦堂**

東京市神田区錦町一丁目十番地
大阪市東区道修町二丁目十一番地

印刷者　　川崎義美
東京市牛込区若松町十九番地

発行者　　松原四郎
東京市神田区錦町一丁目十番地

発行所　　**大阪文錦堂**
大阪市東区道修町二丁目十一番地

大阪文錦堂活版所

大阪市西区中之島二丁目十番地
大阪市西区中之島二丁目十番地